沖縄の口承文芸における伝説の位置

――粟国島の昔話の伝説的性格について――

遠藤庄治

一　報告の目的と対象

今回の報告で取り扱う課題は、題名の通り「沖縄の口承文芸における伝説の位置」である。しかし、沖縄の口承文芸一般の中に沖縄の伝説を位置づけることは、限られた時間の中で取り扱う課題としては大きすぎる課題であり、抽象的な報告になってしまう恐れがある。そこで、今回の報告では、沖縄の粟国島に於ける昔話の伝説的性格に限定して考察することに止めたい。

日本の昔話は、西欧のものと比較すると、伝説的性格が強く、中でも沖縄の昔話は、伝説的性格が強いと言われている。ここで、粟国島の昔話を対象にして、その昔話の中の伝説的性格を見ることは、これまで言われてきた沖縄の昔話の伝説的性格を検証し、合わせて、その理由などを探る手掛かりとなると考える。

二　伝説の概念について

ところで、本報告に入る前に、これまでの口承文芸研究の成果をもとに、伝説はどのような概念と理解されてきたか、また、伝説と昔話の相互の違いをどのように考えてきたかが報告の前提となると思われる。そこで、この二点についての考え方の例として、『昔話事典』の叙述を掲げておきたい。

1　伝説の概念

具体的な事物に直接結びついて、真実と信じられてきた伝えである。その真実性を保有する点は、神話に近づいていると言えるが、神話が聖なる神の世の物語であるのに対して、これは人間、またはそれに準じた時代の伝承である。その伝承が、人間の時代に属する点において伝説は、昔話の世界に近づいていることになるが、虚構性を許す昔話とはやはり大いに異なっている。

2　伝説と昔話の相違

(1) 伝説は真実にあったと信じられてきたのに対して、昔話は真実のものとは言えず、「あったかなかったか知らぬ」ものとして、むしろ虚構の含まれるものとして叙述されてきていること。

(2) 伝説は特定の時代、人物、地域と結合し、かつ特定の事物を証拠として伝えるのに対して、昔話は「昔」「ある所」「ある人」などと一般的、不確定な時代、人物、地域によって叙述されること。

(3) 伝説は叙述に一定の形式を持たず、さまざまな方法によって、真実性を主張するのに対し、昔話は一定の叙述により、空想の世界にはばたいていること、など。

しかし、伝説と昔話との相違は、叙述の内容から見るとき、きわめて判別が困難となる。その叙述のモチーフを互いに融通する場合も少なくないし、そのパターンをも一致させることもしばしばある。また、昔話伝承の実態をみれば、きわめて伝説的様相によっていることも多い。

〔以下例示内容要約〕①昔話が年中行事やことわざの由来となる場合……節季の祭りや言葉のあそびごとを証拠とし伝説的カタリゴト的性格を帯びる。②「鳥獣草木譚の小鳥前世」の小鳥の由来譚的性格……伝説に分類されるべきことが早くから指摘されている。③地域的変化……これを今日の伝承地域差で言うならば、昔話の伝説的様相は、特に南西諸島において顕著であり、なかでも宮古、八重山諸島における昔話は、そのほとんどが由来譚として伝承されている。わが国における昔話の伝承は、きわめて伝説に接近していると言わねばなるまい。

（『昔話事典』弘文堂　一九七七年刊　六一八頁「伝説」項目執筆者　福田晃）

三　沖縄の伝承の変化と粟国島の伝承

(1) 沖縄における伝承の変化

現在、沖縄では、伝承者が明治の話者から大正の話者に、話者の言葉が方言から共通語に変わりつつある。このことは、伝承の変容とも強い関わりを持っている。沖縄が明治政府の直接支配下に入り、琉球藩となったのは、一八七二年であるが、いわゆる琉球処分によって、実際に統治されるようになったのは、一八七九年である。しかし、それ以後も琉球王府時代のさまざまな制度は、明治政府の沖縄に対する「旧慣温存」の方針によって、明治の末期まで保たれた。沖縄の大半を占める農村や漁村の生活まで、近代的な変革の波が押し寄せ、各村の古くからの祭りが簡略化され、王府が各村に任命し各村の祭りを行わせた祝女が村落において権威を失った。さらに古い土地制度の改革は、明治三十年代には終っていた。

したがって、沖縄において話者が明治の世代から大正の世代に推移することは、話者の世代が変わったことを意味するだけではない。古くからの口承文芸の基盤となった生活と本質的には変わらない中で幼年期や少年期を過ごした話者から、生活そのものが近代的に変容した後で成長した話者に変わったことを意味しており、それを象徴的に示しているのが話者の言葉の方言から共通語への変化なのである。

こうした世代による違いがあるために明治の世代が真実と信じて話した話でも、大正以後に生まれた世代では、その真実性に疑問を持ち、話者自身が話の内容を虚構と認めて話す場合も多くなっているのである。

ところで、沖縄における昔話の伝説的性格は、昔話の結末が由来譚となること、及び話者が昔話を真実として語る点に求められることが多かった。そこで、この点について、沖縄の昔話を点検することが必要になると考える。

しかし、沖縄本島の近年の調査で聴取される昔話の話型は、蛇婿入・天人女房・子育て幽霊・猿長者などの限られた話型であり、十数年前まで伝承されていた多くの話型を聞くことが出来なくなっている。そのために、沖縄本島では、これらの課題を検証することが不可能になっている。

もっとも、沖縄の近代化の波及の時期は、地域や島によっても異なっていた。したがって、昔話の伝承状況も島によって異なっている。昔話の伝説的性格を検証するのには、古い伝承を保持し、近代化以前の伝承に近い姿を保っている地域の伝承が好ましいと考える。ここに昔話の伝説的性格の事例を示そうとする対象地の粟国島は、沖縄本島の影響が比較的及びにくかった島である。

(2) 粟国島について

那覇の北西五七キロの地点にあり、東シナ海に浮かぶ面積九・七九平方キロの孤島である。島には、西、東、浜の三つの集落がある。この中でも、島の集落の中では最も高い位置にある字西が最も古く、字浜が最も新しいと言われる。昭和一〇年ころには、人口三万人が居住したが、現在の人口は千人程度に減少し、離島の高齢化が課題となっている沖縄の中でも、最も高齢化が進んでいる島でもある。島は西が高く東が低い地形で、水が乏しく、稲作はほとんど行われず、雑穀を栽培した。島の各家には、トゥージと呼ばれる海岸の凝灰岩で作った天水溜が置かれ、その大きさがその家の富を象徴しており、これは家の宝とされていたために、家を継ぐ長男以外には、渡さなかった。また、隆起珊瑚礁で作物が作れない島の北側には、蘇鉄が植えられ、飢饉に備えていた。今も、島の北側には、多くの蘇鉄が残っており、その蘇鉄の実を取って味噌などを作っている。那覇からの交通は、一日おきの船便及び小型飛行機による一日一回の定期便がある。

(3) 粟国民話調査経過概況

第一次粟国島調査は、昭和五五年八月十六日から八月二一日にかけて、沖縄民話の会と沖縄国際大学口承文芸研究会との合同で行った。その後、補足調査が三回ほど行われ五〇三話の話数が聴取された。更に、昭和六一年九月二一日から二二日にかけて本文整備のための補足調査を沖縄民話の会、沖縄口承文芸研究会、東海学園女子短期大学との合同で行った。昭和六三年にも補足調査を行っている。

聴取話数は、字西が一七四話、字東が一一三話、浜が三二九話で、合計六一六話であった。この聴取話を分類すると、動物昔話が一一話型で三〇話、本格昔話が八四話型で二四〇話、笑い話が二三話型で四四話、伝説が八七話型二四五話、世間話が二三話型二五話で、他は民俗、唱えごと、歌などであった。

四　粟国島本格昔話資料
（由来譚及び伝説的性格を帯びたもの）

以下に掲げる資料は、昔話の伝説的性格を検討するための資料である。

1は、話型が『昔話名彙』や『日本昔話大成』の話型に所属するもの及びそれに準ずる話型で、伝説的性格を持った話である。

2は、他地域では、伝説的性格を帯びて伝えられる話。

3は、昔話の伝説化に参考になる話。

ただし、題名で話型が判断できるものは、話型名と伝説的叙述の部分だけを掲げ、梗概が必要なものは、梗概を掲げた上で、伝説的な叙述の部分を示した。また、3については、考察が必要な部分は、伝承話の表現をそのまま示すことにした。

1　昔話の話型で由来譚的性格を帯びているもの

(1)　小便に唾を吐きかける由来と三月三日浜降由来（蛇婿入）　字浜　女（明治二九年生）

結末部……また赤マターには、唾が毒だと思うから、どこもかにも唾は左右と出して、そうしてやるんだよぉ。もう島では、三月三日には海にすべてみんな行くさぁ。そしてほれ、それから出て外で小便するときは、このようにしたと。こんなふうに、唾、左右に吐いてするんだよって。

（昭和五十五年八月二一日聴取）

(2)　三月三日の浜降り行事の由来（蛇婿入）　字東　男（明治三九年生）

結末部……それから、三月三日に潮を蹴って、すべて下してやった。この話から出て、三月三日は、女たちは潮を蹴ってやるんだということは、それから始まったという話なわけ。

（昭和五六年三月二七日聴取）

(3)　蚕及び蚕の顔が馬に似ている由来（蚕神と馬）　字浜　男（大正七年生）

結末部……それで、馬の顔と蚕の顔は、似てるという伝説です。とまった木ってゆうのは、桑の木じゃないですか。それから、島の人は、蚕、普通の虫と違ゆんどうという話がありますね。あれは、一番きれいな虫だということは、昔の伝えです。

（昭和五五年八月一七日聴取）

(4)　島のある家に寄せられている話（魚女房）　字西　男（明治四二年生）

発端部……小さい赤い小魚ちょうど、イユというのは魚です。昔ですなぁ、一人暮らしのお爺さんが、住んでおられたそうです。その爺さんカマと言う名の人ですがな。昔は、この島は、瓶の代用に岩で造ったトゥージいうのに、それに潮水入れて、味噌が徳するように、潮水を料理に入れるんですよな。

結末部……カマは狂ったようになって嘆き悲しんだという話でありました。これ珍しい話。で赤魚ということにつられて、私も立っておって聞いたら、どこかあそこらへんに家があったと思いますが。この家は今でもあるんか、それ分からんですなぁ。

（昭和六一年九月二二日聴取）

(5) アングウェーラー鳥及び年占の由来（魚女房） 字西 男（明治四二年生）

結末部……それからというもの、お爺さんは毎日、海辺でキセルをくわえてですなぁ、待っているけれども、二度と女には会えなかったですよ。そしてついに、悶え死んでしまったということなんですなぁ。

死んで後、お爺さんアングウェーラー鳥になって、口ばしの長い海鳥ですがなぁ。これになったと伝えられておるんです。キセルをくわえて寂しく女を待っていたお爺さんの姿によく似ておるんですな、その鳥が。口の長い鳥だったと。似てますなぁ。

そして海がしけるとギヌチダキ、ギヌチダキと悲しい声で鳴くんですな。ギヌチダキというのは、粟国の九つの嶽の一つのミマユトゥラツカサの神様のおられるあのギヌチダキですなぁ。その拝所の上に止まって鳴き、東の方角へ飛んで行く年は豊年であるんだと。東に向かって飛んで行くと、この島ぐわぁはユガフーだというんです。また、ボージ石のこっち、港の左側にあるウンサチの上から、西の方に向かって鳴きながら飛んでいく年は凶、悪い年といわれております。島ではそのように語り継がれております。はい。

（昭和六一年九月二二日聴取）

(6) ミンチュー屋とマムンヌムイの由来（エイ女房） 字西 男（明治四二年生）

発端部……マムンガーミ（真物瓶？）は、これ普通の人、もうたいがい知っとるはずです。今でも、「ミンチューヤーヌハーウージどぅやたんでぇ、うぬ話や（海人屋の先祖だったんだよ、この話は）」というもんですから。祖先がそうあったという。その子孫の家が、そこの後ろにありましたが。そのミンチュー屋の祖先だと。今はその家の子どもたちは絶えてなくて、子孫は東なんかにはあるようですが。

結末部……して、お婆さんは、爺さんに聞いたマムンヌガーミ、早速あっちに探しにも行ったが、なかったというんです。マムンガーミは、とうとう、どっかに消えておったという話ですがなっ。これ今マムンヌムイ（マヌンの森）とか言うておりましたがなぁ。今でも、どこにあるかは、わからんですなぁ。

（昭和六一年九月二二日聴取）

(7) 星の由来（天人女房） 字西 男（明治三二年生）

結末部……今の七つ星は、親星は上で、下にみることができるの星が子どもの星なんだって。そういう伝説ですが。

（昭和五六年五月十七日聴取）

(8) 紙銭（ウチカビ）の由来（子育て幽霊） 字西 女（明治二九年生）

結末部……それから墓の中で子どもが生まれたことわかって、この世の親、祖父母、親戚がその子引き取って育てたわけさ。それからでて、紙焼くと後生ではそれがお金って。もうこれは、その話なんだけどね。

（昭和五五年八月一五日聴取）

(9) 易の本と天人の所在が不明になった由来（子供の寿命） 字西 男（明治四二年生）

結末部……そうしたら、しばらくしたらこの易学の本なんか全部焼けて。焼き払われてなくなって、それから以後は、あの天人がどこの山におるかというのも、もうわからなくなったと。この子ども方は、成長して、世のため人のために知恵を尽くして、国を治めたぐらいに偉い人なったと。

（昭和六一年九月二二日聴取）

(10) 嬰児の額に墨を塗る由来（産神問答）　字浜　男（大正七年生）

結末部……ほんで、そのころから始まって子どもができたら、沖縄では額に炭を塗る。それは、いい運勢を授けてくださいちゅうことでね。そういうことが宮古には、あったということ。

（昭和五五年八月一七日聴取）

(11) 西原我謝の長者由来（大歳話「笠地蔵」系統の話）　字西　女（明治二二年生）

発端部……ニシブラガージャ（西原町我謝）に、だってぇ（大きい）村があるってさ。そこにダンナクー奉公したりしてよ。サンダーよ、サンダー名だって。

結末部……だからよ、ニシブラガージャ今、どこにあるかはわからんけど、金持しておるって。唐からその宝持ってきてからによ。

（昭和六一年九月二二日聴取）

(12) クンチャー夢の由来（初夢の由来）（大歳の客）　字西　女（明治四〇年生）

結末部……わったぁ、粟国島の場合、年の晩の日には、年寄りたちは、「寝て、早く寝て、クンチャーの夢をみなさい」と子どもたちに言うのは、その意味なんだよと。この話は、八十過ぎて亡くなられた姑がそんなふうにおっしゃっていたわけ。

（昭和五五年八月一九日聴取）

(13) 猿の赤尻由来（猿長者）　字浜　女（明治三九年生）

結末部……して、神様に言われた通り石焼いて置いたら、その石の上に座って、もうお尻が焼けて。そんであれからお猿のお尻は、真っ赤になった話。うん。（昭和五五年八月一九日聴取）

（注）他の話では、大晦日の晩に囲炉裏に火を焚く火正月の由来、正月元旦の若水の由来、庭に置く黒い庭石の由来などになる。

(14) 恩納節の由来（手なし娘）　字浜　女（明治二一年生）

結末部……とぉ、これは、これだけですけどね。して、その歌もあるんですってよ、私の姉さんは歌っていましたよ。「恩納森登てぃ、恩納マチガニーが手ぃ振い美らさ」（恩納森に登ると、恩納マチガニーの手を振る美しさよ）といって、その歌歌っていましたよ。

（昭和五五年八月一九日聴取）

(15) サバニの由来（継子の水汲み）　字西　女（明治三二年生）

結末部……して、継親が継子死なせようして造ったサバニというのが、このころからありますよ。今でも造りますよ。糸満の人はね、サバニを漕いで魚捕りに行くんだよ。それ、継親が造ったのが始まりだと。

（昭和五五年八月一九日聴取）

(16) 七月の継親念仏の由来（継子の麦つき）　字浜　女（明治三〇年生）

結末部……この昔の継親というのは、これほど悪者でこの七月念仏の継親念仏はよぉ、それ継子と継親とのなかから出ているよぉ。もうそうだったらしいよ。昔の継親は、意地の悪いものだ

ったというよ、昔は。うん。（昭和五六年三月二七日聴取）

（注）他の話では、大麦を搗くときに、水を入れて搗く由来として伝える。

(17) 仲順長者伝説（孫の生肝）字東　男（明治三九年生）

発端部……えぇ、仲順大主のお話します。

結末部……「アッキヨォ！　我が生みの子よぉ、黄金の花も銀の花も湧き出て、これで命救われたさぁ。なっ、生みの子の命救われたさぁ」と夫婦、非常に泣いて喜んだと。それで三男は喜んで、大変金持ちになり親孝行したという話。

（昭和五六年三月二七日聴取）

（注）琉球の最初の王は、源為朝の子と言われる舜天王と言われる。舜天王の孫に当たる義本王の代に、日照りと長雨が続いたために、徳がないとして王位を追われる。仲順大主は、その義本王の子孫と言われ、沖縄本島中頭郡北中城の仲順に住んだと伝えられる長者。仲順大主を祀る御嶽が仲順にあり、位牌は仲順の安里家に祀られている。この伝説は、その仲順家の話として伝えられ、沖伊良部以南の各地の八月踊りでは、この話を組み踊りにしたものが上演された。また、七月エイサーなどの芸能の中にも、仲順大主が登場する。話型は、「孫の生肝」系統のものである。

(18) 猫と鼠及び高お膳の穴の由来（嫁と姑）字西　女（明治四〇年生）

梗概……大晦日の晩に、嫁が機を織っていると、正月に使うために下げて置いた生肉を姑が来てなめたので、嫁が「マヤー（猫）同じむん」と箒を投げつけると、姑は猫になる。夫が帰ってきて、母親のことを聞かれ、姑が猫になったことを話すと、夫は「お前のようなものは、鼠になれ」と打つと、嫁は鼠になって天井に上がる。

結末部……うっぴなぁ穴のあいているお膳がありますでしょ、ねっ。この高お膳に穴開けているのは、猫なった母親が息子の食べる高お膳の下に入ってね。息子が食べ物食べながら、そこへ落としたらそのお膳の穴の方から物食べるという話なんだけど。また、「親に文句をいうんだ」と、それで穴を開けているんだという話もあるけどね。これもうどうだかねぇ。それでこの高お膳は。

（昭和五五年八月一九日聴取）

（注）箒で人をたたかない由来として伝える場合もある。

2　他の地域では由来譚となる話型

(1) 他の地域でチブル蜂の由来。（チブルから出た米）字西　女（明治四〇年生）

梗概……昔、大晦日の晩貧乏な年寄り夫婦の家に神様が現われて、何故火にあたっているか聞く。年寄り夫婦は、隣の家から米の叺を借り米粒を出し、年を越そうとしたが貸して貰えなかったと話す。神様は、湯を沸かさせて、御飯と御馳走を作ってやり、一緒に食事をした後で、この実がなったら米俵を作ってから全部一緒に取れと教えて種を一粒与える。その種から多くの夕顔の実がなったので、米俵を作って実を切って見ると米が出てくる。隣の金持ちがこれを聞き、神様に種をもらおうとする。神

様は、種を金持ちに与えるとき、実を切るときには、門中全部呼んで、家を締め切ってから切れと言う。夕顔の実が実り、実を家の中に取り入れると、門中の人達やにわか親戚まで米が貰えると沢山押し掛けてくる。家を締め切ってチブルの実を切ると、チブルの実の中から蜂が出て家の中にいた人は、刺されて死ぬ。神様が年寄り夫婦のところにまた来て、お金と、若くなるのとどちらがいいかと尋ねる。元の若さに戻りたいと言うと、正月の若水を浴びて若返れと教える。年の晩の日に若水汲んできて浴びると、年寄り夫婦は若返る。

（昭和五五年八月一九日聴取）

（注1）沖縄では、雀蜂のような大きい蜂をチブル蜂という。この話は、他の地域ではそのチブル蜂の由来として語られる。

（注2）この話は、「腰折れ雀」系統の話と思われる。ただし、この話のように年の夜の話として伝えられているわけではない。

(2) 他の話では、カシチー由来（妹は鬼）　東　男（明治三九年生）

梗概……前の家は父親と息子、後の家に母親と息子が住んでいる。親は親同士、子供は子供同士で結婚する。息子の嫁が鬼になり、村外れのクンジモーに行き、牛の首から血を飲むようになる。親は、馬を息子に与えて息子を逃がす。息子は、馬に乗って逃げ、ある村の金持ちの家で働いて婿になる。二、三年後、妻が止めるのも聞かずに、息子は自分の元の家の様子を見に行こうとする。妻は災難に会ったときのために宝の玉を二つ与え、また、村に蜘蛛の巣が張っていたら入らないで帰るように忠告する。

息子が馬に乗って自分の村に行くと、鬼になった元の妻に見つかり捕まる。妻は太鼓を持ってきて打たせ、その間に包丁を研ぐ。天井から鬼に食われた両親の骸骨が落ちて来て、太鼓を息子の代わりに叩き、息子を逃がす。息子が馬に乗って逃げると鬼が息子を追い掛ける。息子は鬼に追いつかれそうになって妻から貰った玉を一つ投げるとサラカチ山になるが、鬼は抜け出して追い掛けてくる。二番目の玉は火の玉で、鬼は火に焼かれて死んでしまう。

息子が婿になった家に帰ると、妻は夫が鬼に食われたと思い、悲しみのあまり死んでいる。息子は、後生に行って妻を連れて帰ろうと思い、墓に歩いて行くと、後生の子供達が遊んでいる。子供達に妻が通らなかったか聞くと、その女なら毎日洗濯をしに来ると言う。息子が待っていると、妻がやってくる。それを捕まえようとすると、妻の姿が消える。そこに年寄りが現れ、取り戻し方を教えてくれる。言われた通りにして妻を捕まえるが、妻は後生の閻魔の許しを得なければ帰れないと言う。

息子は妻と一緒に閻魔のところに行き交渉する。閻魔は妻が帰ることを許さない。息子は、持っていた刀を立て、許さないなら後生の者を皆殺しにすると言う。閻魔がようやく許すと、妻は身体や目鼻も生きた人間になる。帰ろうとすると、年寄りが来て、馬が尻を上げたらワジリガーラーだから目はぜったいに開けるな。また馬が鳴いたらお前の島が見えて来るときだからまだ目開けるな。馬が身震いしたらお家に着いているから目

開けなさいと教える。馬が身震いして家の前についた。それは、妻の初七日の日で、用意をしていたので、その御馳走で祝おうということになり、二人はそれから裕福に暮らした。

（昭和五五年八月一九日聴取）

（注1）死者が生き返った話は、しばしば赤飯（カシチー）の由来となる。この話の初七日のために用意していたものを祝いの御馳走に作り変えたというのが、それにあたる。

（注2）なお、この話には、傍点部で示したように、粟国の地名が登場する。

3　昔話と伝説の関係について参考となる話

A　山神と童子　西　上原英昌（明治四二年一二月二六日）

梗概……三人兄弟のうち、長男だけが運が悪く貧乏だった。それで、何故貧乏なのか占ってもらうために旅に出た。

語り……そこへ行くために、向こう島に行くためには、海を渡るとか言っとった。この行くときに、お祖父さんが教えたのはこのちょうど島だったら、大和ガーから下りて行くんだよ。そうしたらそこに今、行く防波堤ですがな。朝未明からあっちまで行ったら、また夜にしか帰って来れんからというんで。そこのムッテー角辺りだといっておったが、そこ下りて行ったら、その角に人が出ておった。

梗概……婆さんに会うと、家の蜜柑の木に実がならないからついでに占ってきてくれと頼まれる。

語り……しばらく下っていきますと坂を下りてだんだん海に、海岸にいきますからな。今度は女の人が途中で立っておったと。

梗概……女には、七つになる子がものを言えないので、占ってきてくれと頼まれる。

語り……下りてまた行って、今度はやっと海辺にたどりついて見ると、習ってきた舟が来るということを聞いたんだが、そこ行ってみるとなかなか舟も来ない。渡舟が来ないのでどうにもならん。困り果てていますとパシャパシャと大きな水の音をたてて、大きな龍が洞窟から二匹顔を出してきたって。海から入ったんでしょう。お祖父さんの話では、その龍が出てきた洞窟は、大和ガーの洞穴くらいの大きさじゃないかなぁ。

梗概……二匹の龍に出会い天に登れないわけを聞いてきてくれと頼まれる。龍に海を渡してもらい占い師の家につき、蜜柑の木、ものを言えない娘、天に登れない龍について占ってもらう。その男の家がなぜ運が悪いのかは占ってもらえない。帰る途中に、占いの結果を教えて、龍からは宝のヌブシの玉をもらい、ものを言えない娘を嫁にし、蜜柑の木の家からは、宝物の一杯詰まった壺を貰って家に帰る。

（昭和六三年三月二四日聴取）

B　サンジュウフウシ　西　上原英昌（明治四二年一二月二六日）

梗概……親が年寄りになって生まれた子がおり、孝行者で小さいときから良く働いた。

語り……で、もうこの島を治める何か番所の人がおるんでしょうなぁ。その人の家なんかの加勢したりして、手伝ったりして食料を入れて年寄りの親に、孝行してあげたと。そして、両方の親がとうとう亡くなってからは、みんなでお葬式なんかもすま

せてから後、今度は、「みんな亡くなって、これからは自分が食うだけだから、天界も世間も廻って歩いてみようか」と旅行みたいに出かけたんでないですか。この島なら、ちょうどウガンの後の崖のからこう上がって、向こうの島まで行って、天まで行って見ようと思って、旅行好きな子かもしらない。

梗概……崖を登って行くと、天帝の命令でその子供を天に案内する石猿が待っている。石猿は、蜜柑を取ってきて、子供に食べさせ、これからギライに行くが、ギライでは鬼に捕まるから、よそみしないようにと言う。旅の途中に子供がよそみをすると、鬼に捕まり、石臼に乗せられて、鬼に食われそうになる。石猿が臼に乗って、「空摺、空摺」と言って臼を回せば助かると教える。その通りにして子供は助かる。

しばらく行くと地下に入る道になる。立派な御殿が見えたので子供がよそみをすると、そこは鬼の御殿で子供は鬼に捕まってしまう。石猿は蜜柑に化けて、鬼に食べられ、鬼の腹の中で暴れて、鬼を降参させ、鬼に大きな屁をさせて、鬼の腹から出る。

語り……それから、天に行って神様と会ったということですなぁ。天の王様からですかなぁ、皇帝とかなんとかいっておったが、それで「お前は、サンジュウフウシの名やるから、今度は自分の元いたところ行って、立派に島を治めて行くように」というふうに天の王様からですかなぁ。この人から言われて、それで、自分の里に帰ってみんなでよく治めるように考えたという話になりましたがなぁ。これ、サンジュウフウシ、星の名前をもらったというんだから。

おもしろい話だ。ところどころはっきり覚えてはいませんがなぁ。お祖父さんがよくしてくれた話で。この話の元は大晦日の日に那覇から年寄来て、「那覇から来てタンメー、話ぐわぁチカチクィンソーレー」と言って、酒ぐわぁ持って来てやって、よもやま話が出て、その人がそのお祖父さんに、それもやりよったですが。

（昭和六三年九月二五日聴取）

五　粟国島昔話の伝説的性格について

「粟国民話調査経過概況」で示したように、粟国島では、八四話型、二四〇話の本格昔話が聴取された。この昔話の話型及び話数は、伝説の八七聴取話型及び二四五聴取話数とほぼ同じなことが注目される。この小さな島の中に、娯楽性の高い昔話と、島の聖地や年中行事などの由来を伝える伝説とがほぼ同様な密度で伝承されていたのである。

ここでは、「1　昔話の話型で由来譚的性格を帯びているもの」として、一八話を掲げた。ただし、この中に、「蛇婿入」が二話、「魚女房」が二話引用されているので、話型数としては、一六話型となる。さらに、「2　他の地域では由来譚となる話型」はここに掲げた話の中にも、由来譚への傾斜が見られ、話者の語りによっては、由来譚としても語られる話なので、粟国島の昔話は、八四話型中、一八話型が由来譚的性格または、その傾向を持っているとも言える。ただし、例えば、同じ「魚女房」の話型でも、話者によって、

由来譚になる場合とならない場合がある。

また、これらの話型のうち、例えば、「蛇婿入」「蚕神と馬」「天人女房」「子育て幽霊」「子供の寿命」「猿長者」「産神問答」などは、本土においても、伝説または、由来譚としても伝承されている話型なので、沖縄の特殊な現象とは言えない。ただ、これらの話型を多く伝えること自体、沖縄ではこれらの由来譚的性格を持つ話が好まれたことの証明になるかも知れない。

これらの話が伝説的と考えられる点は、二つに分けられる。一つは、由来譚となっていることであり、もう一つは、島の特定の家や地名に寄せられている点である。

資料にあげた話のうち、発端部で島に実在する地名や特定の家に寄せて語る話は、「魚女房」及び「エイ女房」の二話である。展開部には、そうした表現はほとんど見られない。しかし、これらの話のすべては、結末部が由来譚となっており、沖縄の昔話の伝説的性格と言われるものが、本土における動物昔話と同様に、そのほとんどが発端部や展開部では、空想的話として語られながら、結末部で由来譚となることで、伝説的性格を帯びることが明らかになるのである。特に⑱の「嫁と姑」は、猫と鼠の由来譚であるが、前世において、人間だったものが動物となる点で、話の構造が動物昔話に類似している。

こうした昔話の由来譚と伝説は、明らかに異なっている。粟国島の祭りや聖地に関する伝説は、発端部や展開部においても、実在した人物や島の地名と強く関連して語られるからである。例えば、昔話の「魚女房」及び「エイ女房」は、確かに粟国島の特定の家に寄せられ、あるいは島の地名と結合されているが、その結合の度合いは、伝説の場合とは違って、それほど緊密なものではない。また、由来譚の内容も、島の家や地名に寄せたものを除けば、年中行事・人生儀礼の由来が、若水、三月三日の浜祭り・年占・お盆・赤飯などの由来であり、習俗の由来としては、紙銭（ウチカビ）・嬰児の額に墨を塗る由来など、事物の由来としては、蚕・星・歌・易の本・猫と鼠など、広域に行われている行事、習俗であり、一般的な事物であることが注目される。この点でも、島に伝えられた伝説とは、違いがある。島の伝説の多くは、島の固有の行事や聖地の伝承がその目的であるからである。

ところで、粟国島の昔話で注目されることは、「3　昔話と伝説の関係について参考となる話」として上げた二つの話である。この二つの話は、同一の話者が祖父から聞いた話として伝える話である。「A　山神と童子」は、話者によれば、この話を話者の祖父が話すときには、すべて粟国島の地名に寄せて語った話だという。話者の住む字西の集落は、粟国島の中でも、最も古い集落といわれ、西が高く東が低い島の西端に近いところに集落がある。この話型は、普通は旅の途中二泊して、宿を借りた家から、次々と占うことを依頼され、それを引き受けたことが結果的には、主人公の幸福となる話型であるが、歩けば一日もかからずに島を横断できる狭い島なので、そのためか旅の途中で宿を借りるモチーフが脱落し、そのかわりに、旅の行程は、傍点で示したように、高い西の集落から低い東の海岸に旅する話として語られている。

「B　サンジュウフウシ」では、これも祖父から聞いた話というが、

この話も祖父は島の話として語ったという。しかし、この話は、結末部の後で話者が述べるように、

おもしろい話だ。ところどころはっきり覚えてはいませんがなぁ。お祖父さんがよくしてくれた話で。この話の元は大晦日の日に那覇から年寄来て、「那覇から来てタンメー、話ぐわぁチカチクィンソーレー」と言って、酒ぐわぁ持って来てやって、よもやま話が出て、その人がそのお祖父さんに、それもやりよったですが。

という話であり、話者がまだ幼い頃に、大晦日の日に那覇から来た年寄り（馬喰だったという）が、話者の家に宿泊し、そのときに聞かせてくれた話である。それを話者の祖父が現在の話者に語るときに、島の地名に寄せ島の話として語ったというのである。この話は、沖縄では「唐話（とうばなし）」と呼ばれる中国から伝えられた話であり、島の話ではないことを話者の祖父も充分承知していたものと思われる。すなわち、話者の祖父は、意図的に島の話として語ったと思われるのである。同様な傾向は、特定の家や地名に寄せて語られようとした「魚女房」や「エイ女房」にも認められる。

こうしたことから、次のようなことが考えられる。沖縄では、語りが家の中で伝えられる場合もあるが、同時に集落を単位として伝えることもある。話の好きな子供や青年は、自分から話好きの年寄りのところに出掛けて行って、話を聞くことが多かったのである。そうした伝承の場と関係して、話の聞き手が必ずしも幼児ではなく、島のことに関心を持つ青年達が多かったこともあって、話の面白さを虚構・空想の面白さだけではなく、島に関連する話に仕立て、真実性をもたせることを話術の一つとしていたことが伺えるのである。

沖縄の話が由来譚的性格が強く、また、さまざまな事に寄せて語ることが多いのは、こうした話術と関係しているのではないかと思われるのであり、さらに、同一話型の伝説が異なった地域の伝説として伝承される、いわゆる異動伝説も、こうした話者の表現と無縁ではないようにも思われるのである。

（付記）本稿は日本口承文芸学会の研究例会（一九八八年十月十五日）での発表をまとめたものである。

（えんどう・しょうじ／沖縄国際大学）